Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

「親指姫」の名の由来を求めて

北川公美子
（東海大学短期大学部）

1．はじめに

「親指姫」といえば、数あるアンデルセン童話の中でも知名度が高く、子どもだけに限らず幅広い年齢層の人々に親しまれてる物語である。この物語が子どもに好まれる1つの要因として、その題名に「姫」という言葉を用いていることがあげられるように思う。しかし、原題“Tommelise”には「姫」を連想させるような単語は含まれていない。岩原武則は、次のように述べている。

> 日本では「おやゆび姫」と訳されているが、原題では人物名としての Tommelise「トムマリーサ」である。また、最初の表題は Tommelangelisa「親指の長さのローサ」という意味から考えて、これは「親指リーサ」とも訳せるものでもある。したがって、日本語の表題にある＜姫＞というイメージはどこにもない。＜姫＞というイメージは、日本人にとって特別な世界の女の子というイメージがある。しかし、リーサという名前は北欧社会ではごく一般的な女の子の名前である。したがって、これは身近な女の子のお話という感覚を読者（聞き手）は抱く表題なのである[1]。

“Tommelise”を「親指姫」と訳すことは、原作者アンデルセンの思い描いたものとは異なるイメージを日本の読者に抱かせてしまう恐れを含んでいる。

では、こうした題名はいつ頃から使われ始めたのであろうか。

2．明治期

“Tommelise”が初めて翻訳されたのは、1895（明治28）年10月で、雑誌『少年世界』に「新竹取物語（一名指子姫）」という題名で連載された。

題名を見てもわかるとおり、この物語はその最初の邦訳名から「姫」という言葉を使っている。これは、「指子姫」よりも「新竹取物語」を主題名としているところに理由があるように思う。日本の物語の祖といわれる「竹取物語」と関連づけることによって、日本人に馴染みの少ない西洋の物語に対して、読者に親近感を抱かせようとしたのではないだろうか。実際に物語の内容においても、不思議な出生状況、複数の求婚者の排除など、2つの物語にはいくつか共通点を見いだすことができる。「竹取物語」のかぐや姫が月という異界の存在であったように、Tommelise も、人間と姿形は似通っていても人間とは異なる特別な世界の存在であるという共通点もあげられよう。

「新竹取物語」は「竹取物語」と関連があると読者に抱かせるための配慮はその題名だけはない。1つはこの物語の著者「森晋太郎」が「みやつこまろ」というペンネームを使っていることである。これは「かぐや姫」を見つけ育てた「竹取の翁」の名でもある。この「みやつこまろ」の名は著者名だけでなく、物語の中にも登場している。原作では、Tommelise と王子の結婚を見届けたツバメが暖かい国から自分の巣のあるデンマークへと戻り、そこに住むおとぎ話のおじさんにそれらを話して聞かせたために私（アンデルセン）がこの話を知ることができた、という形で物語を終えている。この最後の箇所を「新竹取物語」では、次のように訳している。

> 燕は此の目出度き終りを見て『左らばよ』とて、再び其の温かなる國を捨て、日の本に來る。而して斯く書るす、「<u>みやつこまろ</u>」が家の庇に巣ひ、ツ井ツッツ井ツ唱ひ、此の話を告げ畢んぬ。
>
> （傍線引用者）

もう1つの配慮は、物語の最後に Tommelise の名を変える箇所である。原作では、王子は Tommelise という醜い名前に代わって、マーヤ（Maja）という名を与える。この部分を「新竹取物語」では、次のように書いている。

> 指子姫なる名は然るべからず、決して麗はしき名にあらずして、御身には相當しからざるなり。今より宜しく、「<u>花の赫奕姫</u>」と呼びへ玉ふべし。」
>
> （傍線引用者）

表題名「（新）竹取物語」、主人公名「かぐや姫」

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

その養い親「みやつこまろ」。「竹取物語」の主要素ともいえるこれら3つの言葉を用いたことにより、アンデルセン童話“Tommelise”の初訳は、日本人読者に対して親近感以上に「竹取物語」と同類の日本の物語であるかのような感を抱かせる。そうすることが、この初訳者の意図に含まれていたならば、その主人公に「かぐや姫」と同じく「姫」を用いたことは必然的なことかもしれない。

3．大正期

大正期に入っても、長田幹彦の「小さな親指姫」、巖谷小波の「ゆび姫」と訳し、特に長田の「小さな親指姫」は現在まで数多く訳され続けている「親指姫」という邦訳名の最初であると思われる。

しかしその2年後、雑誌『赤い鳥』に掲載された鈴木三重吉による邦訳名「摩以亜物語」[2]は、明治期から現在に至るまでの“Tommelise”の邦訳名の流れを追う中で、最初で最後の大きな抵抗の証となった。

三重吉の手によるこの物語の内容は、決して原作に忠実な訳とはいえない。しかし、その邦訳名のみに着目してみたとき、「姫」を付ける題名ばかりが出ていた中で、それに流されて名付けるのではなく、内容から独自の題名を用いた事は評価してもよいのではないだろうか。

このような三重吉の一矢報いた行動も、しかしそれに追従する者が出現せず、受け継がれていくことはなかった。その後の大正期において、彼以外が訳した題名にはすべて「姫」が付けられ、やがてそれが主流を占めるようになる。

4．昭和期

昭和期（1926～1989）までの“Tommelise”の邦訳名の傾向をみると、昭和期に入っても、そのほとんどが「親指姫」である。

そして、大正期後半からのその流れを決定的なものとしたのが、1938（昭和13）年から訳された『アンデルセン童話集』（全10巻）[3]である。大畑末吉の手によるこの童話集は、アンデルセン童話としては初の全集であり、訳者の言葉によれば、数種の英訳ドイツ訳を参照しながらも、原語デンマーク語に基づいたものであるという。その大畑の“Tommelise”の訳は「親指姫」であった。大畑がどのような経緯で「親指姫」と名付けたにせよ、これ以後この題名が独占権をもつようになる。

三重吉のもの以外は、すべて「親指姫」が用いられ備考欄にあげたその時期の主な選集・全集においてもすべて「親指姫」と訳されている。

このことは、絵本の世界でも同様である。1989年までの“Tommelise”の絵本82冊を対象に調査した結果1冊を除き題名はすべて「親指姫」となっている。こうした中、“Tommelise”本来の姿を再発掘してくれたのが『おやゆびちーちゃん』である。松井直の絵本に対する情熱によって作られたこの絵本は、“Tommelise”が絵本の世界で息を吹きかえしたように感じさせてくれる。しかし、この絵本の出現も三重吉の「摩以亜物語」のときと同じく、後に続くものが出ずに今日に至っている。

5．おわりに

日本における“Tommelise”は、その最初の邦訳名からすでに「姫」が使われ、大きな変動もないまま現在まで使われている。そして、アンデルセン童話の“Tommelise”といえば「親指姫」以外考えられないほど、日本においてこの題名は定着している。それによって、岩原のいうような「身近な女の子のお話という感覚を読者に抱かせる」という意図は汲まれずいるのかもしれない。しかし「親指姫」が“Tommelise”の厳密な邦訳名でないにせよ、ここまで根強い定着の推移をみてくると、日本においてより親しまれ、多くの人々によってこの物語が受け入れられた要因の1つが、この邦訳名にあったことは否定できないであろう

《註》

1.岩原武則　「アンデルセン童話研究（3）－2冊目の童話集について」　『アンデルセン研究』第12号 1994　pp.10

2.この物語は「赤い鳥」に3回にわたって掲載されているが、最初の2回（第3巻5・6号）では「摩以亜物語」、最後の3回目（は第4巻2号）では「小さな摩以亜」という題名に変更している。

3.全10巻のうち、第8、9、10巻の題名は『アンデルセンお話と物語集』。

《参考文献》

1.続橋達雄　『日本児童文学の《近代》』
大日本図書　1990

2.北川公美子　「アンデルセン童話の絵本について」
『アンデルセン研究』第13号　1995

3.北川公美子　「大正期のアンデルセン童話－鈴木三重吉の「親指姫」再話－」
『東京家政大学生活資料館　紀要』第二集　1997

NII-Electronic Library Service